

## 座長のまとめ

大 山 勝（鹿大）

本群は、最近、副腎皮質ホルモン剤の中で局所作用が強力で、かつ全身副作用の軽微なものとして登場したベクロメサゾン（ベクロ）の鼻内スプレーによる臨床成績とアミノ配糖体系抗生物質の鼻副鼻腔粘膜からの吸収を論じたものに大別される。

ベクロに関する演題では、健康成人においては、かなり大量の薬剤（1600 $\mu$ g/日）を4週間、鼻内スプレーで投与しても下垂体副腎系への影響は認められないことがしめされた。

これに関して、ベクロの化学構造上の特徴が局所毛細血管からの吸収移行を阻害するためなのか、あるいは吸収された薬剤の分解、排泄が速いことによるものか等について熱心な討議が交わされた。その結果、現在のところ、(1)局所抗炎症作用が強力なため投与量がより少量で済むこと、(2)吸収された薬剤は、肝で急速に不活化されるために全身副作用の少ないことなどが最も考えられるとの意見が支配的であった。

また、アレルギー性鼻茸に対するベクロの鼻内スプレーによる効果を鼻鏡所見の変遷と光顕ならびに走査電顕による形態学的特徴を対比検討した成績がしめされた。それによると、鼻茸の縮少傾向と組織学的浮腫の著明な減少との間に、ある程度の相関がみられることから、本剤は局所作用もさることながら組織浸透性も良好であることを示唆した。しかし、粘膜表面における毛細血管の拡張像や表面超微細構造の変化については、噴射剤に用いられているフロンガスによる影響を大いに考慮すべきであるとする意見が多く出された。

アミノ配糖体系抗生物質（パニマイシン）のネブライザーを始め局所、全身投与による血中濃度の比較検討成績では、鼻ネブライザー、就中、上顎洞内注入群でより多くの血中移行が証明される成績をしめし、鼻副鼻腔繊毛上皮から本剤が吸収されることを明らかにした。しかし、喉頭ネブライザー群では、血中移行が全くみられないことに関しては、元来、肺胞系からは経静脈法には互に匹敵する薬物吸収が観察されているので、疑議が出され解決は将来に持ちこされた。

また、カネンドマイシンのネブライザー療法後に、採取粘膜の処理（洗浄群と非洗浄群との比較）に基づいて、薬剤の分布態度を検索した報告からは、本剤は単に副鼻腔粘膜表面に吸着して局所作用をしめすのみならず粘膜組織内に十分移行することがしめされた。

その他、最も基本的な事項であるが、粘膜からの物質吸収には動物による差がみられるか

また、現今の動物実験成績をそのままヒトに適用し得るか否かについての問題提起がなされた。この問題に関して、呼吸上皮からの物質吸収は粘膜の生態とそれによる受動、能動両輸送そして物質の物理化学的性状等の複雑な因子が関与するので、将来これらの重要かつ基礎的な課題を解明することこそが本医用エアロゾル研究会に課せられた宿題であろうと結んだ。